

死の抱擁

——『ダロウェイ夫人』の愛——

伊 東 保

『ダロウェイ夫人』(Mrs. Dalloway)の冒頭で52歳のクラリッサ・ダロウェイ(Clarissa Dalloway)は六月のある朝、夜会のための花を買いに出かける。国会議員のリチャード(Richard)の妻として彼女が出来る唯一の創造的なことは彼方此方に住んでいる人々を一ヶ所に集めるパーティーを開くことなのである。夜会のためにドアが外される手筈になっていることを考えながら玄関のドアから外に出ると朝の空気は爽やかで、彼女は18歳の少女時代を過ごしたブアトン(Bourton)の記憶へと帰っていく。

なんて愉快なこと。なんてスリル。というのも、今でも聞こえるあの蝶番が微かにきしむ音をたてながら、ブアトンで、フランス窓をさっと開けて広々とした大気の中に飛び込んで行った時にはいつもそんな気持になったものだから。早朝の空気は、何て爽やかで、何て静かで、もちろんここよりも静かだったわ。波のぴちゃぴちゃする音みたいで、波の口付けみたいで、冷たくびりっとしていて、しかも(あの頃18だった娘にとっては)厳かで、実際、開け放った窓のところに立っていると、なにか恐ろしいことが今にも起こりそうな気がしたわ。(P. 5)⁽¹⁾

安全な室内から窓やドアを開けて外の冷気に直面した時の感じは、安全な陸地

から水面を見下ろすという連想を生み、まだ何も知らない18の乙女は言い知れぬ身震いを覚えている。買物から帰って居間に入ろうとする時にも52の彼女は同じような感じを持つ。

……水に飛び込もうとする人が飛び込む前に眼下に海が暗くなったり明るくなったり、波が今にも砕けそうになりながらも水面を穏やかに分割するだけで、そのた打つにつれて海藻を揺り動かしたり隠したり真珠をちりばめたりするのを見て、一瞬思い止まる時のような、えもいわれぬ緊張感…… (pp. 34-35)

後にクラリッサは彼女の分身であるセプティマス (Septimus) の自殺の報せを聞いて、自分がサーペントイン池に一シリング銀貨を投げたことがあったと思いがすが (p. 202)、18歳の彼女と52歳の彼女に共通するのは、新しい経験を前にした緊張感であり、それは入水自殺のイメージで表されている。しかし彼女はその一歩手前で止まっているが、セプティマスはその一歩を踏み出してしまうのである。52歳のクラリッサはドアから出るのに対し、セプティマスは二階の窓から身を投げるが、18歳のクラリッサは窓ともドアともいえるフランス窓から出て、二人の関係を近づけている。

『ダロウェイ夫人』には自殺だけでなく、死のイメージが溢れている。鳴り出す前に「厳かさ」「緊張感」(p. 6) をクラリッサに感じさせるビッグ・ベンを始めとする一連の時鐘は刻々と迫って来る死を、特に心臓を患った後の彼女には示している。ブアトン時代の恋人のピーター (Peter) が彼女の目の前で、落ち着かない時に遊ぶナイフも死神の大鎌の代用であろう。

現在の彼女の死の脅威は少女の頃と違って家の中にある。外には「彼女の愛するもの、生・ロンドン・六月のこの一瞬がある (p. 6)」のだが、「生」の世界での買物から帰った家の玄関は「地下納骨堂 (vault) のように涼しく (p. 33)」彼女は「尼」になったような気分になるのである。続いて彼女は病気をしてから自分の寝室にしている屋根裏部屋に上がり、「シーツは清潔で、端か

ら端までピンと太い帯のように張られ」ているのを見、「私のベッドはだんだん狭くなって行くわ」(p. 35)という感慨を漏らす。彼女の寿命を表すかのように蠟燭は半分燃え尽きている。この屋根裏部屋には生気が見みられず、ベッドは体の幅ほどの棺になりシーツもそのまま経帷子になりそうで、部屋自体が納骨堂になりそうである。彼女は半ば死んでいるのであり、この日一日口にする『シンベリン』(Cymbeline)の挽歌「もはや恐るることなかれ……」も半ばは自分自身への挽歌である。

もう一つの「死」が花屋の前で突然爆発音を立てて止まった車のなかに現れる。すべての交通を停止させ、止まると同時にブラインドを下ろして中を見せないこの神秘的な車の正体を人々はいろいろ推測するが結局それは明らかにされない。しかしブラインドについている奇妙な木の模様が謎を解く鍵になる。クラリッサの本屋のウィンドーに『シンベリン』を見つける前に死後のことを考えているが、彼女の説では、自分は死んで、ブアトンで霧を持ち上げているのを見た木々の一部になって人々の心の中に生き残ると考えている(pp. 11-12)。ピーターはリージェント公園のベンチで居眠りをして夢の中で森の中を歩き、木々の枝と空が作り出す巨大な女性の姿を見、彼女に誘われて死の願望を持つ(pp. 63-64)。セプティマスは軍隊で上官であったエヴァンズ(Evans)が木の向こうの死者の国から呼び掛けてくるのを聞く(p. 28, 78)。「木を切ってはならない。神がいるのだ(p. 28)」というセプティマスの考えには、木の霊や死にゆく神といった古代信仰的な匂いがする。三人の中心人物にとって木は「死」と密接に絡み合っているのである。この木の模様を付けたブラインドが下ろされた車の窓の内は人間が見てはならない「死」の世界であり、中に乗っている時の翁が交通をすべて停止させたのである。少女時代のクラリッサがフランス窓を開けて予感した「恐ろしいこと」も未知の世界「死」であったのである。

買いものに出かけたクラリッサは何度も道を横切るために歩道の端で立ち止まる。しかし自殺願望のある彼女にとっては、これも非常に危険な位置である。

実際に歩道から飛び出してしまうのが、ウルフの短編「遺品」(“The Legacy”)のアンジェラ (Angela) である。クラリッサと同じように国会議員の妻、アンジェラは世間知らずのお嬢さん育ちであるが、夫と対話が少なくなって、無為の生活を反省し社会奉仕の仕事が始めるが、そこで知り合った B.M. という男に社会主義を吹き込まれ、議論するうち、B.M. を恋するようになり、B.M. は墮落を提案するが、彼女は決心がつかず、B.M. は予告通り自殺し、彼女も後を追って自殺をする。

「遺品」は『ダロウェイ夫人』と共通する要素を持っている。国会議員の夫とお嬢さん育ちの妻と妻の恋人という三角関係である。B.M. に当たるのは少女時代のクラリッサに社会主義を教えたピーターと、共に婦権運動を論じたサリー (Sally) である。娘のエリザベス (Elizabeth) はクラリッサに似ていないと書かれているが、家庭教師のキルマン (Kilman) に教えられて社会主義改革と女性の自立を考えているところは少女時代のクラリッサと同じである。ここにもエリザベスと、その愛情を得ようとするクラリッサ、キルマンの三角関係がある。そしてセプティマスも死ぬことによってエヴァンズと一緒にになると考えれば、妻ルクレチア (Lucrezia) との間に三角関係が出来る。

ピーターは18の頃のクラリッサにとって一番気の合う男性であったし、今でもお互いの思っていることは口にしなくてもわかる仲である。そのピーターを捨ててリチャードと一緒にになったのは彼女の言い訳み言葉によれば、

……結婚生活では、くる日もくる日も同じ屋根の下で暮らす人間の間に少しばかりの我儘と少しばかりの自由がなくてははいけないけれど、それをリチャードは私に、私もリチャードに許しているんだわ。(たとえば今日の午前中あの人はどこに行っているのかしら。何かの委員会でしょうけど、何だとは決して尋かかったわ。)ところが、ピーターと一緒にいたらすべてを分かち合わなければならないし、何もかも細かく詮索されてしまうの。(p. 10)

ということである。しかしながら夫が一旦帰宅してすぐにまたはっきりと行き先も告げずに出かける時には淋しさを隠しきれない。前の引用が自らの決断を正当化しようと強がっているのに対して、この時は自ら慰めようとしている弱さが見えるのである。

彼がドアを開けるのを見まもりながら、人には威厳や孤独が、夫婦の間にさえ深い淵があって、それを尊重しなくちゃいけないんだわ、とクラリッサは考えた。(p. 132)

「深い淵 (gulf)」と「それを尊重しなくちゃ」という言葉には深い哀しみが感じられる。「自立」は結局佻しい屋根裏部屋のピンと張られた温かみのないベッドのシーツの形でしか与えられていないのである。独り寝のベッドは「子供の頃からシーツのように絡みついている処女性 (p. 36)」を払い除けられない彼女が半ばは自ら望んだものである。旅行の先々で「夫の期待に背いた (failed him) (p. 36)」というの、夫との性的接触を拒否したということであろう。しかし彼女は自分で拒否しながらも同時に淋しさを感じているようである。

『ダロウェイ夫人』の十年前にダロウェイ夫妻は『船出』 (*The Voyage Out*) に現れている。40代のリチャードは、18歳のクラリッサと同じように何も知らないレイチェル (Rachel) に突然キスをし、初めてのキスにレイチェルは「人生には今まで想像もしなかったような無限の可能性がある」「素晴らしい事が起こった」⁽²⁾ と感じる。しかしその夜彼女は夢を見る。

彼女は長いトンネルを歩いている夢を見た。トンネルはだんだん狭くなり、両側の湿ったレンガに触れることができるようになった。そのうちトンネルは開けてアーチ形の部屋になった。気が付くと彼女はその中に閉じ込められていて、どちらを向いてもレンガに突き当たり、訳もわからない事を喋りながら床にしゃがんだ、長い爪をした、醜い小男と二人きりにされていた。男の顔はあばたになっていて動物のような顔をして

いた。男の背後の壁からは湿気が滲み出て、それが集まって水滴になり、滑り落ちていた⁽³⁾

これは明らかにフロイト的な夢で、トンネルは陸でありアーチ形の部屋(vault)は子宮である。無意識のうちに性を恐れた彼女は自らの子宮に逃げ込むが、そこにはすでに獣のような男性がすでに入り込んでいて、男性器からは分泌液が滴り落ちてくるのである。

リチャードと結婚してクラリッサが逃げ込んだ家も、冷やっとした地下納骨堂(vault)であり、同時に子宮である。棺の置かれた彼女の屋根裏部屋は子宮の中の子宮である。彼女の子宮にピーターが三十年振りに不意に訪れた時、彼女は繕っていた夜会用のドレスを思わず「貞操を守る処女のように隠そう。(p. 45)」とする。それに対してピーターは角製の柄が付いた、三十年前から持っているナイフを開いてドレスを指す(p. 46)。ドレスは身を護る盾であり、ナイフは女性を攻撃する剣である。⁽⁴⁾ 従ってナイフを見ながら彼女は「歩哨が眠ってしまって護ってくれる者のいなくなった女王」が「体の上を茨が僅かに覆っている状態で身を横たえている」(p. 49)ような気がする。

性を拒否するクラリッサに対して、ナイフをちらつかせるピーターは多情な人間として描かれている。インドに渡る船の中で知り合った女性と結婚し、今はインドで若い人妻を恋して離婚のためにイギリスに帰りながらも、道で出会った娘の後を『ユリシーズ』(Ulysses)のブルーム(Bloom)のようにそっとなつたりする浮気者である。しかしそれは同時に彼の魅力になっており、クラリッサも再会してすぐに「彼は今でも全くうっとりするほど魅力的だわ」「どうして私はこの人と結婚しないと決めてしまったのかしら」(p. 47)と考える。彼が今恋愛中だと打ち明けた時にも、いい年をして恋という「あの怪物」に引きずり込まれるなんてと考えながらも、彼には自分には無い「恋愛中」というものがあって、しかも「私以外の女と」と妬ましく思う(pp. 50-51)。

性愛を怪物と考える見方はクラリッサの分身セプティマスにより顕著に見られる。子供が欲しいという妻に対して、彼は「シェイクスピアは男と女の愛を

唾棄すべきものと考えた。交接などは卑猥に思えた」したがって「このような好色な動物」を増殖することはできないと答える (p. 99)。この怪物はレイチェルの夢の中に出てきた動物の顔をした子宮の中の異形の人物と同じものであるう。

いつもマッキントッシュを着て、中で汗をかいているキルマンのこともクラリッサは「先史時代の怪物 (p. 139)」と考える。「鈍重で醜く月並みで優しさも品の良さもない (p. 138)」キルマンが愛と信仰を信条としているからである。愛も信仰も献身を求め、個人の自由と尊厳を損なうから、クラリッサは避けている。しかしキルマンの愛はクラリッサの美しい娘を独占したいという願望に現れ、エリザベスを「もし完全に自分のものにし、永久に自分のものにして死ねたら (p. 145)」というのが望みである。そしてこの望みは18歳のクラリッサがサリーと初めて一つ屋根の下に寝た時の感情を表すオセローの台詞「もし今死ねたら、これ以上の幸福はあるまい (p. 39)」と同じものである。サリーはエリザベスにとってのキルマンと同様、クラリッサにとっては社会のことを教える教師であったが、レイチェルにとってのリチャードと同じように性の教師でもあった。クラリッサはそれまで「性については何も知らなかった (p. 38)」のであり、初めて唇にキスをされたのもサリーによってであった。クラリッサにもキスによって「啓示のような宗教的感情のようなもの (p. 40)」を感じる時代があったのである。

クラリッサとピーターが別れ話をしたブアトンの家の庭の繁みに囲まれた噴水の口は壊れていたが盛んに水を滴らしていた (p. 71)。この噴水はその立地からも青春の生命力を表しているように思われる。口が壊れているのは自然な生命力の発露をクラリッサがピーターを拒絶することにより止めたからであるが、止めてもなお止めきれないものがあった。現在のクラリッサの死の屋根裏部屋の浴室の水道の蛇口からは水滴がゆっくりと落ちていて (p. 35)、生命力が全くなくなってしまったわけではないことを示している。

怪物に身を委ねるということは身も心も相手と一緒にすることで、いわば『嵐が丘』(Wuthering Heights)の世界である。『船出』のクラリッサは少女時代に

この小説が好きだったことをレイチェルに語っているが、40代のクラリッサはオースティン (Jane Austen) の方が良いと語っている。⁽⁵⁾ ピーターがサリーに与えた小型本のエミリー・ブロンテ (Emily Brontë) は『嵐が丘』であると思われる。クラリッサは『嵐が丘』の世界を捨てたが、ピーターは捨ててきていない。つまり彼はヒースクリフ (Heathcliff) を続けているのである。少女時代のもう一つの愛読書はシェリー (Shelley) で (p. 38)、『船出』でも、『ダロウェイ夫人』のもととなった短編「ボンド街のダロウェイ夫人」(“Mrs. Dalloway in Bond Street”)でも、「アドネイス」(“Adonais”)の一節「此の世の徐々たる汚れに染まることも……」が引用されている。「ボンド街のダロウェイ夫人」では「アドネイス」の一行が、『ダロウェイ夫人』で何度も繰返し現れる「もはや恐るるなかれ……」に先だて、しかも何度も現れ、二つ並んで純粋な死への憧れを表している。少女時代のクラリッサはロマンティックな情熱を持っていたのである。そしてその情熱はまだ彼女の中に隠されていた。

彼女のヒースクリフ、ピーターはクラリッサの胸の中に一瞬「熱帯の疾風がバンパス・グラスに吹きつけたように」動揺を覚えさせ、「もしこの人と結婚していたら」と彼女は考えるが、同時にピンと張られたシーツとベッドの現実を思い出す (p. 52)。そしてピーターが腰を上げた時、「一緒に連れてって (p. 53)」と衝動的に考える。ピーターが現れた時に感じた、茨だけに護られた女王の不安というのには、その背後に城から連れ出してくれる王子の出現を待つ眠れる森の美女の期待が隠されているのである。この期待を単なる茶番劇として即時に片付けてしまうのは、『嵐が丘』の世界を捨てオースティンの世界を選んだ上流夫人の現実感覚、俗物性で、ピーターが「魂の死 (p. 65)」と呼んだものである。

「女は情熱の何たるかを知らない。男にとってそれがどんな意味があるかを知らない。クラリッサはつららのように冷たい (pp. 89-90)」と考えながら歩いていた時に聞きつけた「錆ついたポンプ」のような乞食女の歌う歌が、実はリヒャルト・シュトラウスの「万霊節」(Richard Strauss: “Allerseelen”)であり、この歌が小説の時間構成を考える鍵になっているというのがヒリス・ミ

ラーの発見である⁽⁶⁾。つまり、万霊節というのは死者の魂が蘇る日であり、女の歌っているのは、死に別れた恋人同士が会おう歌であり、ブアトンの死んだ過去が登場人物の心を通して現在に蘇ることを示しているというのである。確かにこの乞食女は地下鉄の駅の近くに立ち、「漏斗のような、錆びたポンプのような (p. 90)」と形容され、その口は「大地にあいた穴で、しかも泥がつき、ひげ根やもつれた草がまとわりついている (p. 91)」ので、ウルフがこの小説を書く時に発見した「トンネル工事」⁽⁷⁾の方法、つまり登場人物の心の中に美しい洞穴を掘り、それが互いに通じ合うようにする方法のトンネルの入り口に当たるといえる。しかしこの地母神のような女の歌う歌は「あなたの優しい目で私の目をじっと見つめて」「あなたの手を取って優しく握りしめさせて」「誰かに見られたって構うものですか」(p. 91)と情熱的な愛の歌であり、この歌で蘇るのは離別した恋人であるということをミラーは殆ど無視している。

クラリッサの夜会の中心となるのは、予め彼女が招んであった総理大臣や上流の人々ではなく、思いがけずインドから帰ってきたピーターと、突然ふらっと訪れたサリーという二人のブアトン時代の恋人と、突然ブラッドショー医師夫妻 (Bradshaw) によってもたらされたセプティマスの死の報せである。この報せに衝撃を受けたクラリッサは独り小部屋に入り、セプティマスの投身自殺を心のなかで追体験し、その後次のように考える。

私は昔サーペンタイン池に一シリング銀貨を投げたことがあるけど、それ以上は何も。でも、その方はあれを投げたんだわ。私達は生き続けていく (彼女は戻らなければならなかった。部屋はまだ人で一杯で、訪れて来る人も続いていた。) 私達は (彼女はずっとブアトンのこと、ピーターのこと、サリーのことを考えていた) 年老いていく。重要なものは一つだけ。お喋りで取り巻かれ、私の生活の中で醜く、ほんやりとかすんで行き、日毎に墮落と嘘とお喋りうちに落ちていくもの。これをあの方は持ち堪えたのだわ。死は挑戦なんだわ。人々は中心に到達しようと

しても、不可思議にするりと逃げられ、近いと思ったら遠くに離れてしまっていて、恍惚はうすれ、気が付くと自分独りって感じている。死には抱擁がある (p. 202)

セプティマスの死によってクラリッサは自分の生は「魂の死」の生であったと気が付く。真に心を通わせるには窓の前で逡巡せずに飛び込んでいかななくてはいけないと気が付いたのである。したがってカーテンを開けて窓から覗いた時、今まで理想の自立した女性と考えていた隣家の老女と窓越しに顔を合わすが、この時彼女はクラリッサを映した鏡の像になる。明かりを消して一人で寝に行く老女は屋根裏部屋で一人寝るクラリッサの老後の姿なのである。明かりを消した隣家は闇の中へ消え、クラリッサはまた一人の人間、つまり「魂の死」の生活を送っていた自分を見送ったのである。したがって夜会に戻った彼女は生まれ変わった姿になっており、彼女を待ちながらピーターは恐怖とも歓喜ともつかぬ異常な興奮を覚えるが、それはクラリッサのせいだとわかる (p. 213)。彼女は死の中に飛び込んで、死の中にある抱擁を求めて、心と心を通わせようとして、恋人の前に現れたのである。⁽⁸⁾

ヴァージニア・ウルフの小説には性的な要素が希薄であるというのが一般的な見方であろう。確かにウルフには性を拒否しているところがあり、クウェンティン・ベルによる伝記⁽⁹⁾が発表されて以来それは少女時代の精神的外傷によるものとされているようである。しかしウルフの小説には時々はっとするようなエロティックな描写が見られる。抑圧された欲望はそれだけ強くなって出現して来るものではないだろうか。

何も知らない少女クラリッサにとって性は限りない魅力とかぎりない恐怖を同時に与えた。大人になること、性を持つことは彼女にとって死を体験することであった。同性のサリーとの愛は素直に受け入れることが出来たが、ピーターとの間にはなお距離をおかずにはいられなかった。しかし中年に達し、物理的な死を前にして、もう一度過去を取り戻し距離を飛び越え、自分の感情に忠実

に抱擁に身を委ねようとしたのである。

ウルフが死の間際まで書いていた『幕間』(Between the Acts)の最後がやはり愛と憎しみを剥き出しにして原始の世界で抱擁し合う男女の描写である。ウルフにあっても性愛は大切な要素なのである。『ユリシーズ』を評してウルフは、「料理した肉が食べられるのに、どうして生で食べなくてはいけないの」⁽¹⁰⁾と言っているが、『ダロウェイ夫人』は生肉にウルフ流の調理を施したものである。

注

- (1) 使用テキストは、Virginia Woolf, *Mrs. Dalloway* (London : The Hogarth Press, 1963) で、以後文中に頁数のみを示す。
- (2) Woolf, *The Voyage Out* (London : The Hogarth Press, 1965) , p. 85.
- (3) *The Voyage Out*, p. 86.
- (4) この場面について、Makiko Minow Pinkney はクラリッサをベネロペー、ピーターを求婚者と考え、ドレスは破れた処女膜であり、彼女はそれを繕っていると考えている。Virginia Woolf & the Problem of the Subject (Brighton : Harvester Press, 1987), p. 68参照。又、Maria DiBattista は Northrop Frye の “the stock convention of virgin-baiting” を喜劇的にしたものであるとしている。Virginia Woolf's Major Novels (New Haven : Yale Univ. Press, 1980) , p. 38参照。なお、*To the Lighthouse* で Mr. Ramsay の “arid scimitar” が Mrs. Ramsay の “fountain and spray of life” の中に這入り込んで交歓する場面も非常に性的である。*To the Lighthouse* (London : The Hogarth Press, 1967) , pp. 61-63参照。
- (5) *The Voyage Out*, p. 62.
- (6) J. Hillis Miller, *Fiction and Repetition* (Cambridge, Massachusetts : Harvard Univ. Press, 1982) .
- (7) ed., Anne Olivier Bell, *The Diary of Virginia Woolf* II (London : The Hogarth Press, 1978) , p. 263, p. 272.

- (8) 「遺品」では先に死んだ恋人の許へ行くために、Angela が実際に車に飛び込み、死の中での抱擁を求める。なお Modern Library 版の自序によれば、構想ではクラリッサ本人が自殺することになっていた。
- (9) Quentin Bell, *Virginia Woolf: A Biography* (London: The Hogarth Press, 1972) .
- (10) *The Diary II*, p. 189. ちなみに、この記述のすぐ後に、「ボンド街のダロウェイ夫人」が執筆中であることの報告があり、この短編が二ヵ月後に『ダロウェイ夫人』に発展する。